



粒子線がん相談クリニック 院長

辻井 博彦

Tsujii Hirohiko

相談クリニック開設の経緯は。「私は長年にわたって放射線医学総合研究所で重粒子線がん治療研究に従事してきました。この間、放射線治療の進歩にはめざましいものがあり、副作用の低減とともに適応疾患の拡大が得られるようになりました。一方、私自身、文部科学省が主導しているアジア原子力協力フォーラムというアジア一か国が参加している研究活動の中で、放射線治療の多施設臨床試験にも携わり、アジア地域に出掛ける機会も多く、その経験を積み重ねた中で、日本のレベルの高い重粒子線がん治療技術を世界に広めたい、と常々感じていました。二〇一一年に放医研を退職した後の翌二二年、関係者の」

力とご協力の下に、わが国初の重粒子線がん治療のセカンドオピニオン外来として当相談クリニックが開設されました。では、国内の患者のみならず、海外から治療を希望する患者の相談もあるということですか。「日本人の患者の相談は、すでにがん治療中であるものの、現状の治療法では満足できないとか、他の治療法があるのでは、とインターネットで調べて来院される方が多いようです。それから当然ですが、医師の紹介を介して来られる方も

レベルの高い治療技術を世界に

おられます。外国人の患者では、韓国、中国、台湾、タイなどからの方々です。アベノミクス効果というが、昨年六月に閣議決定された新成長戦略の下で、官民一体となって日本の医療技術・サービスを国際展開する方策が功を奏しているようです。経済産業省が支援の下でメディカル・エクセレンス・ジャパン(MEJ)を外国人患者の受入支援組織とし、多くの国際医療交流コーディネーター(EAJ、JTB、重粒子線治療支援センターコリア等)を介して、当相談クリニックに来院される外国人患者が増えています。適応のある患者はそのまま重粒子線がん治療を受けることができますし、適応がなくても手術とか、抗がん剤治療を受けるとか、日本の医療技術を世界に知っていただくことにもつながります」

重粒子線がん治療の適応患者とはどのような方ですか。「原則として適応患者とは、がん病巣が局所に留まっている方が対象と言えます。そして手術が困難な部位であることでしょうか。とはいえ、手術が可能な部位でも適応になります。適応外になるものには、がん病巣が全身に広がっているもの、悪性リンパ腫、白血病などががん病巣が全身に広がる性質の強いもの、などがありません」

治療期間はどの程度ですか。「重粒子線がん治療の特徴のひとつは治療期間が短いということです。例えば、期の肺がんで一回、肝臓がんで二回、前立腺がんで二回(三週間)です。前立腺がんの場合、エックス線治療とか、陽子線治療だと三〇、四〇回は必要になります。なお、治療の準備期間に約一週間を要します」

重粒子線がん治療が始まってから今年で二〇年になります。「一九九四年の治療開始から年々患者数は増え、二〇一三年度の患者数は約一〇〇〇人で、二〇年近くの総患者数は八〇〇〇人を超えています。治療疾患別では、一番多いのが前立腺(三三・五%)で、骨・軟部(二二・三%)、頭頸部(一一・六%)、肺(一〇・〇%)、肝臓(六・一%)、直腸術後再発(五・二%)と続き、最近では、膵臓が四・八%と増えています」

今後のがん治療の課題など。「がん治療には、手術、抗ガン剤、そして放射線治療の三本柱がありますが、今や一つの方法ですべてをカバーする時代ではなくなっただけです。当相談クリニックを介して重粒子線治療を使えば有効ですし、ときには手術や抗ガン剤治療と組み合わせることで最善の有効策だと思えます」